

合併症が出現したが 63 病日退院。病理所見上、空腸穿孔部に炎症所見や悪性像等の穿孔を来す原因は認められなかった。

【まとめ】胃癌に対する胃全摘 Roux-en-Y 挙上空腸の穿孔により、腹膜炎を生じた 1 例を経験したので報告した。

4 十二指腸狭窄を伴う進行癌に対する胃空腸吻合術 — 曠置的胃腸吻合法の試み —

北見 智恵・田宮 洋一・二瓶 幸栄
丸山 聡

県立吉田病院外科

【はじめに】十二指腸狭窄を伴う進行癌に対し、胃空腸吻合術が行なわれるが、期待した結果を得られないことが多く、曠置的胃腸吻合法などの工夫が試みられている。

【対象】1996 年から 2002 年まで腹膜播腫症例を除いた胃癌以外に対する胃空腸吻合術 8 例を対象とした。通常の胃空腸吻合術 (A 法) 6 例と曠置的胃腸吻合法 (B 法) 2 例を比較検討した。

【結果】A 法は膵癌 4 例、十二指腸癌 2 例、B 法は十二指腸癌 1 例、大腸癌リンパ節転移 1 例で 3 分粥開始日はそれぞれ平均 9.1 日、5.5 日であった。A 法で 3 例は経口摂取不十分のまま退院となったが、B 法では 2 例とも全粥を半分以上摂取可能であった。術後在院日数はそれぞれ 64.1 日、14.5 日であった。

【結語】曠置的胃腸吻合法の試みについて報告した。

5 肝転移か、原発性肝内胆管癌か？ 膵癌術後 4 年目の症例

岡本 竹司・早見 守仁・大橋 泰博
佐藤 攻

信楽園病院外科

症例は 72 歳の女性。平成 10 年 7 月 29 日、膵頭部癌に対して幽門輪温存膵頭十二指腸切除術を施行した。平成 13 年 8 月より腫瘍マーカーが上昇し、9 月 21 日の腹部 CT にて肝 S7 ~ S8 境界に細

い楔状の LDA を認め、平成 14 年 8 月 20 日の腹部 CT において S8 に径 1.0cm 大の tumor が認められた。

平成 14 年 10 月 16 日、拡大肝右葉切除術、胆道再建術を施行した。病理は高分化型腺癌を呈しており、門脈域に著名な浸潤像が認められた。術前精査で肝転移と原発性肝内胆管癌との鑑別が困難であった症例を経験したので報告する。

6 当院における大腸癌の転移性肝癌に対する肝切除症例の検討

小林久美子・若桑 隆二・植木 巨
石塚 大・木廣 敬祐・杉本不二雄*
刈羽郡総合病院外科
杉本医院*

【目的】当院での転移性肝癌に対する肝切除症例の治療成績を検討すること。

【対象・方法】1993 年より肝切除を施行した 33 人 39 件を対象とし、背景、予後につき検討した。

【結果】性別は男性 20 例、女性 13 例であり、平均年齢 63.0 歳であった。原疾患の局在は結腸が 21 例、直腸が 12 例であり、原疾患病期は Dukes A が 3 例、B が 7 例、C が 23 例であった。肝転移出現時期は同時性は 19 例、異時性が 20 例であった。肝転移切除後の 3 年生存率は 63 %、5 年生存率は 54 %であった。

7 総胆管に発生した腺内分泌細胞癌の一症例

加納 恒久・黒崎 功*・小林 孝
松尾 仁之

新潟臨港総合病院外科
新潟大学大学院消化器・一般外科*

症例は 60 歳女性。既往歴に特記事項なし。黄疸で発症し当院内科受診。腹部超音波検査で総胆管に高エコーを呈する腫瘍を認め、これによる閉塞性黄疸と診断され入院となった。精査により中部胆管癌と診断。肝転移、遠隔転移は認めなかった。根治切除可能と診断され幽門輪温存膵頭十二指腸切除術を施行した。病理診断は II b 病変を伴う結